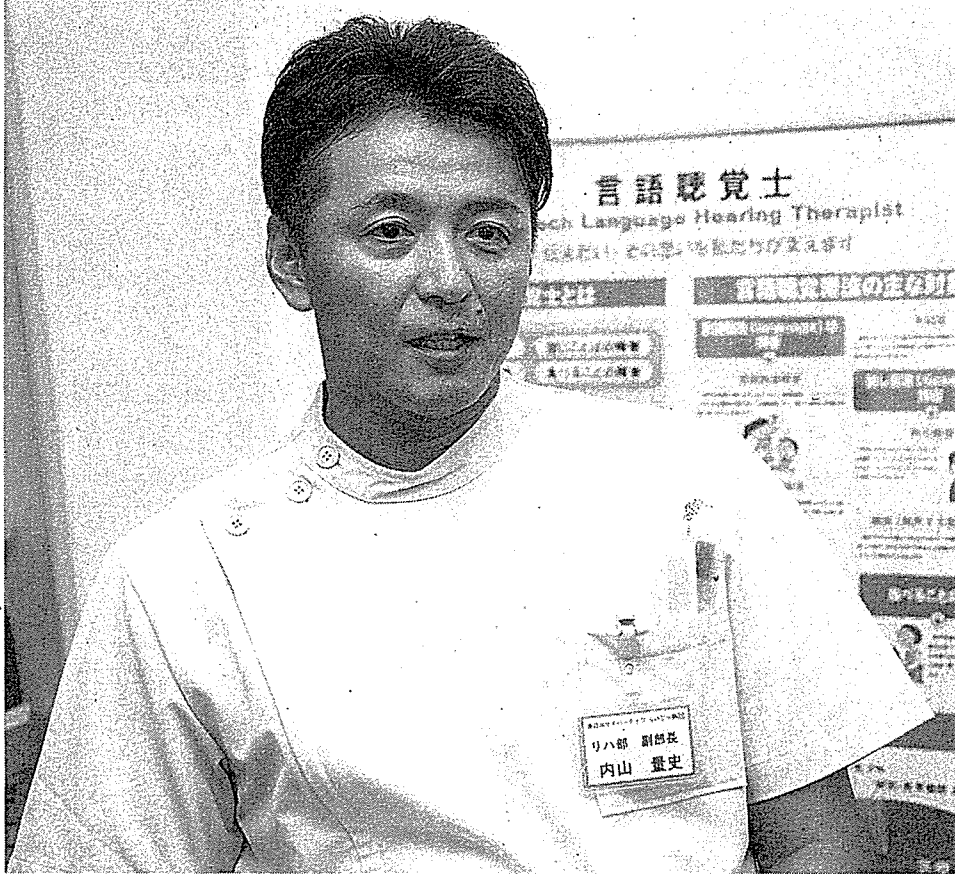


# 朝日求人



あの人と  
こな話

## 人の心に寄り添うことで 深い信頼は生まれる

言語聴覚士／春日居サイバーナイフ・リハビリ病院  
リハビリテーション部 副部長 言語療法科

## 内山 量史さん

うちやま・かずし ●1967年三重県生まれ。父親は遠洋漁業の漁師、母親は看護師という家庭環境で育つ。福井医療技術専門学校(現・福井医療短期大学)で言語聴覚分野を学び、90年に山梨県笛吹市の春日居リハビリテーション病院(現・春日居サイバーナイフ・リハビリ病院)に就職。97年に国家資格ができ、言語聴覚士の資格を取得。現在は日本言語聴覚士協会常任理事、山梨県言語聴覚士会会長として広報活動、後進育成に努めている。

**病** 気や事故、先天性などが原因でうまく話せない、聞こえない、食べ物を飲み込んだり咀嚼したりするのが難しい。そういった障害を持つ人に対してリハビリを行うのが言語聴覚士だ。

「言葉を失うことで受ける精神的ダメージは計り知れない。患者さんはもどかしさを常に感じています。しかも言語障害は症状も回復具合も分かりづらく、ストレスはどんどんたまる。機能回復の支援はもちろんです。患者さんの苦しみを深く察し、心に寄り添うことも大切な仕事です」

時には代弁者となって、患者の思いを他の人に伝えてあげられる存在でありたいと語る。「そのためにも症状だけでなく、その人自身を見ます。例えば表情やしぐさから何が言いたいのかをきちんと把握することはもちろん、入院前のその方の生き方などにも思いをはせながら接するようにしています」

三重県の漁師町で育った。看護師だった母を通して言語

聴覚士を知り、この道へ。まだ国家資格のない時代。現場で臨床を重ねながら学んだ。

若い頃は、患者に頼りないと思われないよう四六時中英顔を意識するなど、「コミュニケーション」で試行錯誤した。

2年目の頃、失語症で話せずも書けなくなった女性を担当。「でも、まだ新人だった僕を信じ、訓練を一生懸命受けてくれた。消灯後も非常口の明かりで字を書く練習をされるほど」。人は、どんな状況に陥っても生きることを諦めないのだと教えられた。

「その方は見事に回復されました。20年経った今も手紙やメールを頂きます」。粘り強く地道にリハビリを積み重ねていくと効果が出始める。すると自然に患者に笑顔が戻る。「その瞬間がうれしくてたまらないんです。言語聴覚士の役割の大きさを実感します」

人生の再スタートに関わる意義ある仕事。「多くの人に知って欲しいし、職業として若い人に目指して欲しい」。温かな笑顔に熱い願いもこぼれる。

井上理江=文 南條良明=写真